



貞山運河の木曳堀を南から北へ望む。左中央は仙台空港のターミナルビル。右奥は仙台湾（29日、岩沼市で本社へりから）

再び活気を 夢運ぶ



「私はひと目、貞山堀をみたいとおもっていたが、おそらく開発などのために消滅しているのではないかとも思っていた。ともかくもこれほどの美しさでいまなお保たれていることに、この県への畏敬を持った」

26 嵯峨散歩、仙台・石巻」

阿武隈川から塩釜湾にかけて、海岸線と並行に延びる全長31・5キロの日本一長い運河、貞山運河。江戸時代初期から明治時代にかけて開削された「木曳堀」「新堀」「御舟入堀」の三つの堀の総称だ。

最も古い木曳堀は伊達政宗の時代、城下町建設のため、阿武隈川流域から木材

「貞山運河」

(岩沼市、名取市、仙台市、多賀城市、七ヶ浜町、塩釜市)



を運ぶ輸送路にする目的で開削を始めたとの説がある。最も新しい新堀の開削は明治時代に入ってからで、ほどなくして物流の主流は舟運から鉄道へと移り、輸送路としての役割を終えた。司馬が「消滅しているのではないかとも思っていた」のはそのためで、次のようにも記している。

「いまはむろん運搬にすらかわれていない。つまりは無用のものなのだが、宮城県がこれを観光として宣伝することなく、だまっ保存につとめていること

は、水や土手のうつくしさをよくわかる」(同)

東日本大震災の津波で護岸が崩れ、周辺の松並木が失われるなど、大変な被害を受けた。復旧工事が行われ、魚が戻り、鳥が羽を休めるなど、少しずつ自然の姿を取り戻しつつある。

沿岸にサイクリングロードが整備され、週末などには自転車乗りが駆け抜けていく。近隣にはゆりあげ港朝市(名取市閑上東)があるほか、JRフルーツパーク仙台あらはま(仙台市若林区)、温泉やレストラン

などの複合施設「アクアイグニス仙台」(同)もオープンし、いきわいを見せる。

今年、貞山運河を活用して地域活性化を目指す一般社団法人「貞山運河ネット」が発足し、今後は舟遊びのイベントや歴史セミナーなどの開催を予定している。

同法人の佐藤四郎事務局長(74)は「将来、仙台空港に降り立った人が舟で貞山運河を進み、仙台うみの杜水族館なんか寄りながら、松島まで行けるようになったらいいですね」と夢を語った。

文・鶴田裕介
写真・菅野靖
操縦士・千葉啓輔
整備士・橋本憲

阿武隈川と名取川を結ぶ「木曳堀」(15キロ・㍍)、名取川から七北田川までの「新堀」(9.5キロ・㍍)、かつて七北田川河口から塩釜湾をつないだ「御舟入堀」(7キロ・㍍)の総称。沿岸は車で近寄れない場所もあり、自然を満喫しながら観光するには自転車もいい。仙台市若林区の海岸公園センターハウス(022・288・4021)でレンタサイクルを行っている。